

神道

——日本の固有宗教をこえて——

サラ・サール(Sarah Thal)

ウィスコンシン大学 マディソン校

(訳：高橋典史)

・書評対象

SHINTO- A SHORT HISTORY

By Inoue Nobutaka, Itô Satoshi, Endô Jun, and Mori Mizue

Edited by Inoue Nobutaka

Translated and adapted by Mark Teeuwen and John Breen

London: RoutledgeCurzon, 2003

BUDDHAS AND KAMI IN JAPAN: *HONJI SUJAKU* AS COMBINATORY PARADIGM

Edited by Mark Teeuwen and Fabio Rambelli

London: RoutledgeCurzon, 2003

SHINTO: THE WAY HOME

By Thomas P. Kasulis

Honolulu: University of Hawai'i Press, 2004

SOURCE BOOK IN SHINTO: SELECTED DOCUMENTS

By Stuart D. B. Picken

Resources in Asian Philosophy and Religion

Westport, CT: Praeger Publishers, 2004

神道は、いかなる著述家をも魅惑する危険な罠を持っている。長きにわたって、「カミの道」は、「日本の固有宗教」とか「日本人であることの本質」といった賞賛のこぼれであらわされてきた。そして、そのような日本のカミに関する宗教的な諸実践についての多くの議論は、本質主義、過度な一般化、ロマン主義といったものに支配されてきたのである。今日では、ほとんどの研究者たちが、これらの問題をうまく回避しているものの、一部の研究者たちは、今もなお、19世紀後半以来、排外主義者や民族主義者たちによって助長されてきた審美的なナショナリズムによる説明を事細かに論じている。それゆえ、神道に関する近年の研究を読むことは、触発されるとともに狼狽もさせられるのだ——触発されるとは、豊かな鋭敏で革新的な研究が、我々の神道に関する理解を変化させてきたからであり、狼狽させられるとは、「経験主義」や「日本らしさ」のような神道についての古めかしく有害な観念が生きながらえているからである。そこで私は、2つのことをなすためにこの機会を用いたい。第一に、本質主義者によるこれらの神道の描写に内在する諸問題を明らかにする手助けをするために、神道史のごく短い概要を示す。第二に、神道史の新たなアプローチが、カミの道に関する我々の理解をいかにして大きく変容させてきたのか、それとともに、どのようにして、そ

して、なぜ一部の研究者たちは、日本的、審美的、体験的な宗教形態としての神道をなおも描き続けているのか、という問題を探るために、近年の4つの研究を取り上げる。

1世紀以上にわたり、神道は、日本の内外の人々によって「日本人の本質」として——すなわち全ての真の日本人を特徴づける思想と行動の根本的な様式として——描かれてきた。すでに7世紀後半から8世紀前半の時点で、天皇家によって編纂された史書が、日本のカミ信仰の論拠になった。18世紀後半の本居宣長以降、初めて学者たちは、日本独自の信仰様式を見きわめるために、これらの初期のテキストを顧みるようになったのである。ここでいう日本独自の様式とは、あらゆる日本人によって表向きには共有されており、なおかつ外国人たちの信仰からは区別されるものであった——そして、その様式とは、本居によれば、自然に対する生まれながらの感受性であり、個人の思考によっては媒介されないカミの意思との没我的な合一なのである。

本居の時代まで、そして、その後も100年以上ものあいだ、カミ信仰はその他もろもろの宗教的な実践形態と実質的には不可分なものであった。仏教の僧侶たちは、神社においてそうしたカミへの儀礼を執行していた。つまり、神社と寺院はともに機能しており、カミは本来のホトケ（本地）の化現（垂迹）としてしばしば理解されていたのである。しかし、本居の継承者たち、とりわけ平田篤胤とその門弟たちは、これを変えようと尽力する。彼らは、19世紀の日本を襲った全ての災難は、異国（つまり仏教）の影響によるカミの汚染によって引き起こされたと主張したのだった。1868年に明治維新のリーダーたちが徳川幕府を打倒し、天皇の名のもとに自分たちの権威を確立しようと努めたとき、彼らは、「神仏分離」、すなわち神に関する（それゆえ天皇とつながる）儀礼、神社、神職たちの「純粹化」を命じ、国学者たちの考えをもとにことを進めていった。そして、彼らが奨励した儀礼と教えは、すぐに「神道」として知られるようになった——さらには、日本人と外国人の双方に対して、それこそが由緒ある日本固有の実践であると説明されたのである。こうして、神々の意思への（結果として、太陽神であるアマテラスの直系の子孫とみなされる天皇への）無私の服従を通して表現される純粹さと誠実さが、典型的な日本人の美德として、声高に叫ばれるようになったのである——そのような美德の無批判で過剰な単純化が、日本のファシズムの台頭を助長し、大戦中のプロパガンダの作り手たちにはとても役立った。要するに、カミ信仰についての本居の直観的かつ美的な理解が、彼以降、日本を説明するために用いられてきた生得的な感受性の国家的な信仰集団——現在、我々が「神道」と呼ぶもの——の展開を煽ったのである。

このことは、あらゆる人々が由緒ある日本の伝統として、神道の土着主義的な形態を受け入れたと主張しているわけではない。1868年以来、前述したように、神道の批判的な観察者たちは、一見すると非政治的なカミの道の政治性に対して敏感であった。早くも1872年には、森有礼が、「元来空想意義なき説を奉信する者」を批判し、「人民をして其創起に係る宗教を奉せしめんとするの計画」について明治政府を非難している（森 [1872] 1928, 3-4）ⁱ——そのような評価は、40年後の1912年に、バジル・ホール・チェンバレン (Basil Hall Chamberlain) の小論「新宗教の発明 "The Invention of a New Religion"」のなかで賛同される。しかしながら、20世紀の前半のあいだ、日本においてそのような解釈を公表することは、危険なものとなってしまった。そのうえ、1904-5年の日露戦争以降、ほとんどの外国人たちは、日本の国内政治の複雑な分析よりも、この新しい強国の性格に関する噂どおりの説明を欲したのである。

1945年以後、丸山真男や村上重良のような日本の研究者たちは、神道を日本国家の強力な道具にしてきた柔軟性を持った価値観を公然と指摘するようになる。それ以来、神道は、近代日本国家のイデオロギーとし

ⁱ 【訳注】 訳出に際しては以下を参照した。森有礼「信仰自由論（譯文）」大久保利謙編『近代日本教育資料叢書 人物篇1 森有礼全集 第1巻』宣文堂書店、1972年、284-285ページ。

て関心を持たれ続けてきた。一方、欧米の研究者たちのあいだでも、1980年代以降、宗教としての神道への関心がひととき高まった。というのも、ちょうどそれは、レーガンとブッシュ政権下で教会と国家をめぐる諸問題に対するアメリカ人たちの関心が急騰し、また、中曽根首相が靖国神社への参拝を始め(それにより、東アジアの日本の近隣諸国を怒らせた)、そして、ヘレン・ハーデカー(Helen Hardacre)が今や古典となった『神道と国家、1868-1988年 *Shinto and the State, 1868-1988*』(Hardacre 1989)を刊行した時期なのである。そして、ここ数年間、我々はこの批判的な研究の優れた成果の数々を受容してきたのである。

このような神道に対する批判的アプローチを結びつけているものは、日本という国家の「神道」を看破することへの専心である。そのため、研究者たちは、何よりもまず神道についてかつて我々が学んできたこと全てを疑問に付してきた。とりわけ次の2つの疑問を念頭に置いている。すなわち、1)神道に関するこれらの観念がいつ現れたのか、2)誰がそれを促したのか、そして、それはなぜなのか、である。このような神道に対する批判的アプローチによる研究は、この分野において広範で系統だったいくつかの新しい疑問を露わにしてきた。そして、その過程において、神道や日本の宗教についてだけでなく、日本の歴史、社会、政治、文化についての我々の理解も変容させてきた。要するに、長いあいだ神道とは、日本と同義であると見なされてきたため、神道に関するこの新しい理解は、日本全体についての理解をも大きく変革させているのである。

神道についての英語による新しい研究——そのほとんどは、1980年代後半以降に発表された——は、下記のいくつかの基本的な前提にもとづいている。これらの前提とは、新しい研究の有用性を示すため、本質的な日本らしさとしての神道という昔からの観念との戦いのなかで採用されたものである。

(1)日本人(市民権、居住地、血筋などのいずれにより定義されようとも)が全て同一であるわけではない。現在も過去も、日本においては多様な人々が、ジェンダー、階級、地域的起源、世代、個人的趣向、その他のたくさんの要素により、異なったことがらを思考し、行ってきた。

(2)それゆえ、単一な日本的ありようなどはなく、存在もしてこなかった。

(3)人々があるものを日本的であると同定したときは、つねにある理由のために——たいていは、自分たちのものが、唯一の正しいありようであるとか、自然なありようであるとか、もしくは愛国的なありようであるなどと、他者を納得させるという目的のために——、そうしてきた。

(4)念、象徴、儀礼は——しばしばそうであるのだが——、政治的目的のために用いられうる。これらの強調点にもとづいた歴史学、社会学、人類学の方法論が、ここ20年間の神道研究を支配してきたのである。

本稿で議論する4つの最近の研究のうち2つは、日本と海外の双方の研究者たちのあいだで、近年主流となっているアプローチを反映したものである。次の1つは、そのような社会学的・歴史学的研究の知見のいくつかを、神道についての入門的で哲学的な考察へ導入している。そして、最後の研究は、上述の諸前提とそこから生じる研究の両方を否定し、抵抗戦をしかけるものである。これら4つの研究は、この分野全体の研究動向の代表と見なすことができよう。

近年の神道に関する英語による研究の射程と力点について理解するためには、マーク・テーウェン(Mark Teeuwen)、ジョン・ブリーン(John Breen)、ベルンハルト・シャイド(Bernhard Scheid)らによって編集・翻訳された、いくつかの先駆的な書物を見る必要がある。2000年、ブリーンとテーウェンは、『歴史のなかの神道——カミの道 *Shinto in History: Ways of the Kami*』を刊行した。同書は、多様なカミ信仰の制度的、儀礼的、思想的展開に関する諸問題に焦点を当てて編纂された論集である(Breen and Teeuwen 2000)。そして、ひととき優れた研究成果として、テーウェンとシャイドがこの後に続いて提出した *Japanese Journal of Religious Studies* の特別号『カミ信仰の歴史における神道を辿る *Tracing Shinto in the History*

of *Kami Worship*] (Teeuwen and Scheid 2002) をあげることができる。同誌のなかの諸論文も、同じように我々が確認可能なカミ信仰の形成と支配の試みの数々に着目している（「神道」の語の起源に関心を持つ読者にとっては、同誌のなかの 14 世紀における仏教の神道（ジンドウ）、すなわち「非仏教的な神々の道」からの神道の展開についてのテーウエンの論文が、とりわけ役に立つだろう）。

しかしながら、そのような論集も、今日、支配的である神道に対する批判的アプローチを、一貫した歴史的全体像のなかに組み込むことには成功してはいなかった。そして、2003 年、テーウエンとブリーンのチームは、1998 年までにその問題に関して日本でなされていた多くの研究成果の統合を試みた書物の英訳の出版という重要な仕事をなしたのである。著名な宗教社会学者の井上順孝によって編集された、この *Shinto - A Short History* (原題:『神道——日本生まれの宗教システム』) は、古代日本（森瑞枝）、中世（伊藤聡）、近世（遠藤潤）、近現代（井上順孝）と年代順に並べられた 4 章から構成されている。

同書の著者たちは、神道を社会的・歴史的コンテクストのなかに位置づけることに関心を寄せている。そして、神道を、井上の言葉でいうところの、歴史上の時代特有の宗教システムの一部もしくは全体としてみるのである。井上の序論における説明によれば、「宗教システム」という概念は、宗教の歴史的展開を全体社会の構造的性質やその変化との密接な関係のなかで探究するためのツールである」(p.3) とされる。こうした編成のなかで、宗教システムは、その主体（当該の宗教の「メーカー」と「ユーザー」）、組織的な回路（「ハード」である建造物と「ソフト」である制度的ヒエラルヒー）、情報（教え、行法、儀礼を通じてもたらされる）によって規定されるⁱⁱ。それぞれの宗教システムは、「類型的な類似性を示す宗教集団群」を含むため、このアプローチは同時代に複数の宗教システムが共存することを見込んでいる。残念ながら、同書の力点は日本の宗教全体ではなく神道に置かれているため、著者たちは、時代の流れのなかで他の宗教システムについて詳しく論じてはおらず、ほとんどのケースでは特定もしていない。また、序論のなかで井上が概略を述べている 2 つめのアプローチ、すなわちより広い東アジア、さらには、グローバルな流れの一部としての日本における神道の展開という問題意識も、あまり深められてはいない。とはいえ、*Shinto - A Short History* の 4 つの章は、最古から現在に至るまで、さまざまな信奉者たちが神道を形成してきた社会的・歴史的コンテクストについての興味深く、洞察に満ちた分析を行っている。

この有用かつ時としてかなり詳細である概説書は、もともと日本人の読者向けに執筆されたこともあり、日本の歴史と宗教について少なくともあるていどは知識を持った読者層が想定されている。それゆえ、この研究書は、そのような必要とされる知識を持った人々のために、神道の政治的展開と宗教的展開のあいだの従来気づかれてこなかった関係性を解き明かしてくれるだろう。

同書で示される神道の歴史の基本的なあらすじは、次の通りである。6 世紀から 7 世紀の新しい天皇制国家が、儀礼、伝説、諸氏族に対する天皇の支配を強固にするために神社の公的なヒエラルヒーを創出したとき、最初の神道システムが出現した。しかし、やがて中世になり、朝廷から権力が奪われていくにつれて、カミ信仰の古代的なシステムの主体、回路、情報は崩壊してゆく。修験道、仏教、儒教のいずれにせよ、神道は他の宗教システムの一部となってしまったのである。そして、多くの神道の政治的な象徴——カミの神聖なる土地（神国）としての日本という観念、三種の神器（剣、鏡、勾玉）の強調、アマテラスと『日本書紀』の神話への注目——が、朝廷とその密教側の協力者たちが輝きを失った天皇家の血統の権威を蘇らせようとしたときに初めて現れる。15 世紀から 16 世紀以降、古代的な天皇制システムが完全に崩壊してしまうと、最終的にカミ信仰の信奉者たちは密教的な諸前提から離れ始めていく。吉田兼俱は、明瞭な神道の伝統

ⁱⁱ 【訳注】 英文ではそれぞれ 'constituents'、'network'、'substance' となっている。ここでは原著に即して「主体」、「回路」、「情報」と訳出した。

(密教によって強く特徴づけられてはいたのだが) をシステム化することに努めた。そして、そのほぼ 300 年後、本居宣長のような国学者たちは、秘密裏に伝えられてきた秘儀的なシステムを避けることで、カミについての研究により多くの人々が関われるようにしたのである。これらの展開と 1868 年の明治維新の後になって初めて、神道は、今やユーザーとしての全ての日本臣民、回路としての新しい官社システム、情報としての国家によって支援された教えを兼ね備えた、支配的かつ十分に発達した宗教システムとして再び出現したのである。ただし、井上が示しているように、近代においてさえも、さまざまな教派や新宗教が、他の宗教システム一般だけでなく、なおも別種の神道システムが存在していたことを示唆しているのだが。

Shinto - A Short History は神道を中心に論じたものであったが、マーク・テーウェンとファビオ・ランベッリ (Fabio Rambelli) によって編纂された論集 *Buddhas and Kami in Japan* は、中世と近世初期を特徴づけたカミとホトケのあいだの密接な関係に真っ向から取り組んでいる。その副題である「習合のパラダイムとしての本地垂迹 *Honji Sujaku as Combinatory Paradigm*」は、同書の革新的な洞察をいいあらわしている。著者たちは、「土地の土着の神々 (カミ) は、普遍的な仏教における神的存在の発現であるとする観念——本地垂迹として日本では知られている観念 (「神々の本来の形態とその土地土地における化現」) ——

(p.1) にもとづく 1 対 1 関係をもはや強調せずに、ホトケとカミとの関係が、どんな単純な一致をもいかにして凌駕していたのかを説明している。現実には、そのような単純な 1 対 1 の一致ではなく、「複雑な習合」が、ホトケとカミだけでなく、あらゆる種類の神々や霊をも含んで出現していたのである。テーウェンとランベッリが指摘しているように、「仏教の内部におけるカミ信仰の諸集団、仏教寺院における神社との混淆、そして、もっと後の段階で独立した宗教、すなわち神道へと発展する仏教に触発されたカミ信仰の集団の展開の根幹にあった」ものこそ、これらの革新的な習合——政治的に有用であり、しばしば「意図して越境的に体系化された」習合——なのである (p.1)。本地垂迹のもとで展開した神々、儀礼、教義、制度の複雑な網目は、そうしてカミ信仰を消失させてしまうことなく、形作っていったのである。

この書の大きな強みは、こうした複雑な習合を明確化したことにある。長い序論のなかでテーウェンとランベッリが明らかにしているように、それ以前のほとんどの研究は、アリシア・マツナガ (Alicia Matsunaga) による先駆的な研究 (Matsunaga 1969) を頼りにして、古典的な本地垂迹のパラダイム自体の出現に注目してきた。そうした研究では、本地垂迹の変化の 4 段階が詳述されてきた。すなわち、1) 異国のカミとしてのホトケ、2) 感覚を持った存在としてのカミ、3) 仏法の守護者としてのカミ、そして最後に、4) 諸仏の垂迹としてのカミ、である。しかしながら、*Buddhas and Kami in Japan* の諸論文は、この歴史的な発展図式を乗り越えて、習合のプロセスに付随し、それを複雑化させたきわめて重要かつ関連した本地垂迹の政治的な展開と実態的な展開の 2 つに光を当てている。

第一に、カミに関わる選ばれた信仰集団——ほとんどのばあい、朝廷と結びついていた——は、仏教と完全に同化させられたわけではなかった。テーウェンとランベッリによれば、その理由は、死にまつわる教学上のタブーのせいではなく、むしろ政治的な必要性によるものであった。彼らが主張するところによれば、8 世紀、天皇の王権のうえに仏教の僧侶を位置づけようとした試みの結果、「世襲の天皇制および貴族制という原理原則を揺るぎないものにする必要性から、天皇家のカミ儀礼を仏教から隔絶することが布告されたように思われる」(p.23) のだ。テーウェンとランベッリが論じているように、その結果が、仏教とカミ信仰の集団のあいだの緊張関係の創出であり、それが両者のなかで繰り返されていく革新を促したのである。

第二に、そして、日本の宗教に関する研究にとって最も刺激的であるのは、テーウェンとランベッリが「神の領域の多様化」と呼ぶものである。同書は、日本の宗教世界が単に仏教や神道と呼ばれるものをはるかにこえるものであったことを、見事に明らかにしている。山々、動物、鬼、死霊、御霊、外来の守護神、神格化された仏教の祖師、その他のおびただしい数の存在が、いかなる特定の伝統の範疇をもこえて生み出され、

崇拝されたのである。同書の諸論文が示しているように、数多くの人々が、各々の目的のためにそのような無数の神々を互いに結びつけ、同様にカミやホトケとも結びつけたのである。そして、彼らは、自分たちが理解可能であり、政治的かつ論理的であるルールに従って、神々のネットワークを創出していった。もろもろのカミ信仰の集団だけでなく、日本における仏教のさまざまな形態も、両者の接触やその他の信仰や思想との接触によって変化したのである。テーウエンとランベリが要約しているように、「そういうわけで、本地垂迹とは、カミを「仏教化させる」ための単純なメカニズムなどではなく、むしろ最も強力で験力を持った複雑な神々を結集するための、きわめて多面的なツールであったのだ」(p.30)。

Buddhas and Kami in Japan の諸論文の対象は、政治的・制度的な歴史から文学や儀礼の解釈にまでおよんでいる。そして、それを通じて神々または霊たちの特定の習合が互いを連想させる、「複数の同一性」もしくは「同一の複数性」といったものの背後にあった要因に光を当てる。諸論文は、大まかに年代ごとの順番で並べられており、古代における雷の子である道場法師の仏法の守護者への変容（アイリーン・H・リン (Irene H. Lin)）から、井上尚実による 1868 年の諏訪神社における神仏分離の記述まで、ずらりと並んだ歴史的トピックを取り上げている。

とりわけ同書のなかの 2 論文は、日本全体の神々についてのきわめて刺激的な再考を行っている。佐藤弘夫は、「怒る神と救う神」のなかで、これまで気づかれてこなかった前近代の日本人々による神々の分類方法を強調している。佐藤は、11 世紀から 13 世紀に書かれた起請文と儀礼の祭文の分析にもとづいて、神々のあいだに設けられた最も重要な区分が、アイデンティティ（それらが仏教のものであるかどうか）ではなく、機能（それらが人々を救済するのか罰するのか）に依拠していたと論じている。そして、佐藤は、「怒る」神々は「日本国内の特定の場所に、彫像・絵像の形態で物理的に存在し」、それゆえ人々を罰するのに最適な位置にいた一方で、「救う」神々は不可視で抽象的であった、という機能と形態の相互関係を示している (p.100)。また、諸存在に関する仏教的なコスモロジーとヒエラルヒーのなかで、如来や菩薩のような救う神々は、それがホトケであろうとカミであろうと、有形の怒る神的存在よりも優位に置かれた。したがって、当時の神々のヒエラルヒー上の秩序づけのなかにあっては、ある起請文の書き手が、抽象的な「三世十方尽虚空遍法界諸仏如来」について述べると同時に、もう一方では、それぞれ有形で聖堂に祀られており、別個の存在とされる同じホトケたち（「当山講堂釈迦如来 [・] 弥勒慈尊」と「転輪法輪堂釈迦如来」）についても言及できたのである (p.105) ⁱⁱⁱ。

そして、これらのより実体的なホトケたちは、八幡、稲荷、伊勢のような有形のカミと結びついて分類された。そういったホトケたちは、特定の場所と不可分である日本のカミに類似した日本のホトケとなったのである。そういうわけで、中世日本の本地垂迹のコスモロジーにおいては、ホトケの「本地」がカミの「垂迹」のうえに位置するのではなく、抽象的な救う神々が、その信仰が何であれ、有形で聖堂に置かれたあらゆる怒る神々のうえに位置したのである。こうして、日本のカミは、インドの神 (*deva*) と各地域で聖堂に祀られたホトケたちとともに、仏教の世界観のなかに 1 つの場を得たのだ。あらゆるその土地土地のものになった神々——カミのみならずホトケも——は、悟りの領域にある諸仏にその源泉を持っていたのだ。

佐藤は、本地垂迹のパラダイムを抽象的な源泉と有形の化現という二極的な構図として再解釈したが、彌永信美は、「本地垂迹と習合神の論理 ”*Honji Suijaku and the Logic of Combinatory Deities*”」のなかでより多面的な解釈を強調している。彼が示唆しているところでは、古代的な秩序が崩壊したとき、民衆からエリートに至る全ての社会階層出身の人々は、自らの立場を正当化するために、あらゆる利用可能な神話的資

ⁱⁱⁱ 【訳注】 訳出に際しては以下を参照した。佐藤弘夫「怒る神と救う神」『神・仏・王権の中世』法藏館、1998 年、355、362 ページ。

源——民衆的な伝承とヒンドゥーの神話の双方を含む——を自由に用いることができたという。彌永は、2つの事例を用いることで、いかにして特定の神々のグループが当時の人々に分かる理由で、互いに結びつけられたのかを示している。彌永が述べているように、自分たちの存在を正当化しようとした神話の作者たちは、起源譚にとりわけ惹きつけられた。彼らが唯一、利用できた形而上学的なフレームワークは仏教のものであったため、彼らはその解決のために仏教の説話に頼らざるをえなかったのである。そこにおいて、「人々が日本の神々について考えるために持っていた唯一の方法は、日本の神々が仏教のコスモロジーと説話のなかに現れるように、ヒンドゥーの神々のモデルに従うことであった」(p.175)。中世の神話の作者たちは、カミ、インドの神々、その他の神々のあいだの対応の複雑なネットワークを創出するなかで、「それぞれの神々が、あらゆる他の神々の役割も演じることができるよう、個々の神の固有性を「中和」し、「無効」にする習合の同定システム」(p.165)を生み出したのである。さらに彼らは、「仏教を変革する運動を続けていく」という新しい教学的展開の試みのなかで、「仏教の内部にある種の「日本的ヒンドゥー教」を創造しながら、複雑なネットワークを意識的に創り出していった」(p.175)と彌永は述べている。それゆえ、本地垂迹思想についてのいかなる研究も、日本と仏教に関する資料だけでなく、ヒンドゥー神話も研究に取り入れるべきなのである。もう一度いうが、中世の宗教世界は、カミとホトケのみをはるかにこえたものから成り立っていたことが、同論文では示されているのだ。

同書のその他の論文は、そのような連想と習合の背後にある具体的な政治力学について論じている。権威が分断された時代において、カミとホトケの政治力学は、世俗の権威だけでなく、中世を通じて領地と民衆に対する権威を得ようと競い合った多様な信仰集団の宗教者やその信奉者をも巻き込んでいた。アラン・グラパール (Allan Grapard) による 13 世紀から 14 世紀の宇佐八幡の託宣に関する考察では、ライバルの神職の一族に対する要求だけでなく、天皇家の領地に対する権威の要求をも強化していた託宣の価値を強調している。また、マーク・テーウェンは、「本地垂迹の神の創造——死の裁定者としてのアマテラス」"The Creation of a *Honji Sujaku* Deity: Amaterasu as the Judge of the Dead"において、アマテラスの信奉者たちが、いかにして本地垂迹によってアマテラスの役割を拡大させていったのかを論証している。彼らは、伊勢神宮の最古の構成員であった古代氏族が消滅したため、あらゆる人々に対してアマテラスの崇拜を広めようと試みたのだった。

テーウェンが主張しているところでは——天皇によるまつりごとでも、アマテラスを国家神とする意識でもなく——、このアマテラスの支持基盤の拡大という欲求が、鎌倉時代における太陽神信仰の急激な高まりに繋がったのだという。ルシア・ドルチェ (Lucia Dolce) も同様に、天皇家の庇護を受けた二十二社のカミが法華経の守護神たちとして定着した日蓮の伝統である三十番神の信仰集団について研究し、強固な支持基盤を確保するための、宗教者たちによる企てに着目している。彼女は、14 世紀の畿内地域における宗教者たちの拡大戦略へ三十三番神の信仰集団の起源を遡るとともに、15 世紀後半の法華宗と神道の提唱者であった吉田兼俱とのあいだの論争が、日蓮仏教におけるカミ信仰のより緻密な醸成を促したことを示している。対照的に、スーザン・ブレイクレー・クライン (Susan Blakeley Klein) は、本地垂迹を支えるために用いられた文学上の諸戦略を説明するために、貴族階級の生き残りをかけた戦いへと注意を向けている。クラインが述べているところでは、高貴な人々——詩歌の師匠と天台宗の僧侶のいずれにおいても——は、門弟たちを惹きつけ、ごく凡庸な自分たちの後継者たちの生活基盤を確保するために、文学上の「垂迹」の背後にある宗教的な「本地」を顕示するために、メタファー、連想、アレゴリー、ことば遊びなどを用いて、隠された真実の秘儀化された伝授方法を強調した。そのような文学上の戦略を通じて、貴族階級の専門家たちは、表面上は矛盾するようなしるしを一致させることができただけでなく、詩歌の研究と創作の宗教的な正当化を提示しながら、ラディカルな非二元論を促すこともできたのである。

本地垂迹のパラダイムが、こうして中世日本に導入されたのならば、その後どのようにしてその影響力は衰退していったのだろうか。ベルンハルト・シャイドは、17世紀半ばにおける、仏教と区別される宗教としての「神道」という新しい意識を強調している。「両部」か「唯一」か——江戸時代における本地垂迹のパラダイムへの挑戦 ”Both parts’ or ‘Only One’?: Challenges to the *honji suijaku* paradigm in the Edo period”」のなかで、シャイドは、吉田派の神職たちによる他の流派に対する自分たちの優越性の確立と維持のための戦いのなかで、いかにして両部神道と唯一神道の意味が、吉田兼俱の原義から仏教的な神道（両部神道）と非仏教的な神道（唯一神道）を区別するものへとシフトしていったのかを論証している。一方、ファビオ・ランベッリは、工匠や他の人々が自分たちの作品についての解釈を形成していくなかで、どのようにして本地垂迹思想が江戸時代を通じて存続していったのかを示している。ランベッリは、15世紀から19世紀のテキストを用いることで、少なくともあるていどの数の工匠や宗教者たちが、「ホトケの宇宙論的な営みとカミの地域的な営みのより小さな次元への投影としての」（p.283）作品を、いかに構想していたのかを明らかにしているのだ。そして、彼が述べているところによれば、作品の神聖化のための本地垂迹という戦略は、平田篤胤やその他の国学者たち、そして、今日の企業にさえも大きな影響を与えてきたという。ランベッリと同様、神道の歌舞である神楽の本地垂迹的な構造に関する論文を書いたイリット・アベルブフ（Irit Averbuch）にとっても、本地垂迹の論理は、今やその仏教的な装飾は失われているけれども、ある種のありようで現代日本において存続しているのである。

一方、井上尚実は、1868年の諏訪神社で起こった仏教的装飾の一扫が、諏訪神社における仏教の僧侶の伝統を終わらせただけでなく、それと同様に、神道の神職の伝統をも終焉させたことを読者に教えてくれる。彼が強調しているように、政府による神職の任命権の剥奪は、カミの子孫である諏訪神社の神職という長きにわたる伝統——今や読者たちが、同論集の他の論文から学んでいるように、本地垂迹のパラダイムの重要な部分を形成した起源にまつわる説明——を破壊してしまったのだ。

トーマス・P・カスリス（Thomas P. Kasulis）の *Shinto: The Way Home* は、これまで検討してきた書とは鮮やかなコントラストをなしている。論評してきた初めの2冊は、専門家か、少なくともとあるていどの知識を持った読者に向けられたものであったが、カスリスの薄い著作は明らかに入門書として書かれている。井上、テーウェン、ランベッリと彼らの共著者たちが、歴史学者、社会学者、文学研究者などであるのに対して、カスリスは哲学者である。確かにカスリスは、そういった分野の研究者たちによる研究が、神道に関する興味深い話題を彼にもたらしていることを認めている一方で（xix）、彼は2つのやり方でそのような分析に対抗しようとしている。その2つとは、第一に哲学的分析を提供することによってであり、第二に物質的、政治的、もしくは（戦時期の軍国主義におけるような）悪しきものではなく、神道における良きものを求めることによってである。すなわちカスリスの書は、現代世界におけるその潜在的な有用性を探し求めることで、神道の積極的な意義を示そうとしているのだ。

そして、カスリスは、2つ方向からそのトピックに対してアプローチしている。第一に、神道もしくはスピリチュアリティの2つのタイプ、すなわち実存主義的なものと本質主義的なものとを区別することによって、彼は分析上の基本的な哲学的フレームワークを提示している。実存主義的な神道のスピリチュアリティとは、カスリスにとっては記述的なものだ。つまり、「生き方を選ぶことから生まれる自己のアイデンティティ」（p.5）である。対照的に本質主義的な神道のスピリチュアリティとは、規範的なものである。つまり、それは、「ある人間の価値、信念、行動を規定または駆動させる・・・その人間の存在内部の核に関わる直観から生じるものである」（p.5）。そして、カスリスは、「これらスピリチュアリティの二形態のあいだの緊張」（p.6）として神道の歴史を語ってゆく。このフレームワークにおいては、古代の神道は、スピリチュアリティの実存主義的形態と規範的形態の双方を含んでいた。続く9世紀から18世紀（すなわち本地垂迹の時代）

までは、実存主義的形態が優勢であった。そして、1801年から1945年まで、すなわち平田篤胤から第二次世界大戦を通じて、本質主義的な神道が支配的となっていた。大戦以降、両者のあいだの力学は未解決のままであるという。

カスリスの解釈は、多くの点において有用であり刺激的である。彼による実存主義的なスピリチュアリティと本質主義的なスピリチュアリティの区別は、緻密な考察については問題があるものの (*Journal of Japanese Studies* [2006] における同書についてのテーウエンの優れた書評を見よ)、確かに規範的なものとして宗教を考えさせられてきた学生たちに、数多くの有益な疑問を投げかけるだろう。古事記と日本書紀の差異についてのカスリスの考察 (p.80-83) ——国内の読者のために書かれた前者と、漢文を読める読者を念頭に置いて計画された後者ということを強調している——は、古代日本の神道を批判的に考えるように読者たちを促すだけでなく、その後の1000年間における日本書紀の優位性についての説明も行っている。そして、同書全体の構造——神道のスピリチュアリティに対する肯定的で魅力的な説明によって読者たちを惹きつけ、そのうえで、いかにしてその魅力 (規範的もしくは「本質主義的な」神道としての魅力) が、有害なナショナリズムの高揚を扇動したのかを示している——が、ノスタルジックなスピリチュアリティの危険な魅惑を伝えてくれる。

しかし、カスリスは、自分が警告しているまさにその罠に陥っている。彼は、本質主義的または規範的なスピリチュアリティの潜在的な危険性を強調するため、自分の書、もしくは、少なくとも自身の歴史分析を組み立てている。それゆえ、彼は、本居宣長の「ロマン主義的ノスタルジア」と平田篤胤と彼の後継者たちの「イデオロギー的ブルドーザー」のあいだ (p.118) に最も重大な歴史的断絶を見出し、それに対して同書の10分1以上 (19ページ) を割いているのだ。カスリスによれば、政治運動家である篤胤は、当時の民族主義的政治への戦闘的な参加を奨励したという¹。一方、平和主義者である宣長は、”appreciation for ‘the ah-ness of things’” (「もののあはれ」のカスリスによる英訳) に最も鮮明に見出せるように、審美的なスピリチュアリティを主張していたという。そうして、カスリスによれば、全く故意ではなかったにもかかわらず、「本居宣長の方法論的、宗教的な諸前提は、その後の2世紀において大きなインパクトを持つことになる結論へと彼を至らしめてしまった——そして、その副産物として、エスノセントリズムの狂信的な形態の基盤を用意したのだ」 (p.116) という。宣長の美学に対する彼の立場から分かるように、カスリスは、そのようなノスタルジックなスピリチュアリティの政治的分岐点から宣長を遠ざけている。

事実上、カスリスは、本居の範囲内に強固にとどまり続けている。神道に関するカスリスの記述は、本居のそれに強く依拠している。つまり、本居が審美的な認識と経験に注目しているのならば、カスリスも同様なのだ。同書の最初の章は、自然とであろうと他の人間とであろうと、結合の経験としての神道について詳述している。カスリスにとって、神道においてはあらゆるものが、他のあらゆるもの、すなわち自然全体の一部である全ての人々やものをつながっているのである。したがって、人々は鳥居で参拝するけれども、その鳥居はあらゆる存在の相互結合への「ホログラフィック^{iv}な入り口」にすぎない。鳥居、霊木、米粒、そして、天皇自身さえも——全てが、「帰る道」、すなわち結合の意識への回帰にアクセスさせてくれるホログラフィックな入り口なのだ。

そのうえ、カスリスは、彼が論じるあらゆるもののうえに、この結合の意識を読み込んでしまう。彼は、宣長で始まり、宣長で終わるといって堂々巡りの論証をしているのだ。カスリスが宣長の解釈にもとづいて述べているように、「固有の神道に関するスピリチュアリティのほとんどは」、宣長が研究した古事記の神話に

^{iv} [訳注] ここでいう「ホログラフィック (holographic)」とは、あらゆる存在は相互結合した全体の一部であるということの意味しているものと考えられる。

において最も明白であるのだが、「明らかに現代における神道のスピリチュアリティの諸側面と一致している」(p.92)。例えば、カスリスは、古事記に関する議論のなかで、「この神道の道は、他のどこかではなく、人が本当に最初からいた場所へと通じている」と断言することで、一般化され、非歴史的な神道について言及している (p.85)。彼の他の主張と同様、この主張も実際にそうなのかもしれないが、(21 世紀における) カスリス自身と (18 世紀における) 宣長を除く他の人々も、8 世紀のテキストのなかに同じような意味を見出すのだという考えを裏づける証拠を、彼は何も提示してはいないのだ。

カスリスのホログラフィックな入り口の強調は、かなり厄介な状況へと彼を追いやっている。1945 年に多くの 10 代の神風特攻隊の操縦士たちが、圧力のもとで自殺任務に「志願した」ことに関しては、豊富な証拠があるにもかかわらず、カスリスは、彼らの行動についてもっとポジティブな解釈を示すことを選ぶのである——ここでもまた、彼の意見を裏打ちする証拠は何もない。カスリスは次のように論じている。「ホログラフィックな推論に [従えば]、全体 (そのホログラフィックな入り口としての天皇をともなった日本というネーション) は、忠実なパイロットたち各々の内にあるのだ。彼らの自発的な死は、このホログラフィックな関係を言明している。結果として、天皇のために死ぬことによって、神風特攻隊の操縦士たちは、彼ら自身のために死んだのである」(p.111)、と。『神道——帰る道』のアイロニー——悲劇的でさえある——は、カスリスが、審美的なノスタルジアの潜在的な危険性について読者たちに警告しているにもかかわらず、彼自身がその畏へと陥っていることにある。

少なくともカスリスはその危険性を認識しており、そうすることで、美的な本質主義の持つ危険からの脱出に半ば成功している。対照的に、*Sourcebook in Shinto: Selected Documents* の著者であるスチュアート・D・B・ピッケン (Stuart D.B. Picken) は、確固として——いきいきとすらして——その深みへとはまっている。ピッケンの神道に関する最初の著作は 1979 年に発表されたのだが、彼は、当時の神道研究のステレオタイプと一般論を真っ向から含みこんでいる (Picken 1979)。ピッケンにとって、批判的な研究は何の価値も持たない。なぜならば、人は経験的にのみ日本を理解することができるからである。

経験的以外のあらゆる手段、経済学的であろうと、社会学的であろうと、人類学的であろうと、政治学的であろうと、このような先行決定的な諸理論をつうじて、日本を理解しようと主張する者は誰であれ、知的な偽りの世界に住んでいると私は論じざるをえない。御祓い、もののあはれ、国がら、こころ、官社のような概念の意味の理解を抜きにしては、その文化の内部の秘密は分からないままである。経験的以外の手段で日本を理解するなど主張をする人々は、西洋のモデルにもとづいて創られた日本について語っているのだ。彼らは物自体——本当にそうであるところの日本自体——について語っているのではない (xvi)。

ピッケンによれば、「唯一の日本 ("the" Japan)」というものが存在し、その真髓が神道なのである。全ての日本人——全てのアジア人さえも！——は、同一の態度を共有している。なぜならば、同書の序文は、「アジア人の精神」、「生命への日本人の愛情」、「比較的温和なアジアの諸文明」などの言及で満たされているのだ。そして、神道、すなわち日本を理解するためにしなければならない最も重要なことは、いかなる分析的な思考も自分から取り除き、その代わりに感情に焦点を当てることである。ピッケンは、同書における最初の抜粋引用についての解説文において、「神道研究への序曲」として「川のなかか滝の下での禊の経験」を勧めさえしているのだ (p.3)。

ピッケンの *Sourcebook in Shinto* は、表向きには彼の教科書『神道の本質的要素——主要な教えへの分析的ガイド *Essentials of Shinto: An Analytical Guide to Principal Teachings*』(Picken 1994) を補うために

計画された神道のテキストの選集である。しかしながら、実際にはそれは、ピッケンの偏向的なフレームワークの内部に置かれたテキスト——しばしばたった数段落だけの長さの抜粋引用——のコレクションである。その活字組みさえも、同書の力点が、引用するテキスト自体ではなく、ピッケンによる分析に置かれていることを露わにしている。というのも、ピッケンの解説文は、抜粋引用よりも大きなフォントで表記されているのだ。

そこに収められた諸テキストは、2つの目的のために選ばれたと思われる。第一に、ピッケンが、日本人の根本的な神道的性格としてみなすものを説明するためであり、第二に、一部の研究者たちが、いかにして自分たちの西洋的な前提にもとづいて神道を（ピッケンの考えでは、誤りかつ不当に）批判してきたのかを示すためである。「明治維新に対する神道思想 ”Shinto Thought to the Meiji Restoration”」についての1節を除き、その焦点は10世紀以前と1868年以降の日本——すなわち天皇制の神道——に当てられている。ピッケンにとって神道は、浄化、神社、美学、そして全てを兼ねそなえる天皇の支えによって成り立っている。それが日本らしさ自体なのだ（これは、日本の天皇一覧、1993年に彼が行った御祓いの儀礼に関する講義、古代の行政区分におけるかつての「一宮」の現代で相当する神社のリストなどを収載している付録において明白である）。

ピッケンの目的は、何よりもまず、単一で根本的な日本のアイデンティティを見きわめることにある。古事記、日本書紀、初期の詩歌の選集についてコメントするとき、ピッケンは——彼以前の本居宣長のように——、「各時代を通じた日本文化の深遠な性格である連続性」(p.32)を明らかにするために、「中国的な外見から「日本的」本質を見分ける作業」(p.1)を疑いも入れずに始めるのである。現代の天皇制についてコメントするとき、ピッケンは、「風刺漫画の登場人物として天皇を描くことは、想像できないくらい悪しきことである。それは不敬に等しい。これは文化的な思考様式に生来備わっているものである」(p.124)という証拠として、宮内庁の防御論的な見解——明らかに加工された皇太子の写真の出版に対する抗議——を引用している。疑いようもなく、ピッケンの頭のなかでは、問題となった出版の編集者たちは、この日本的な思考様式を共有してはいない。すなわち彼らは、真の日本人であるはずがないのだ。

ピッケンは、彼の理論を裏打ちするテキストと、それらに反対するいくつかのテキストを提示し、はっきりと特定している。例えば、彼は、「非神話化」されてしまうような粗雑な神話ではない、普遍的な要素を備えた宇宙論的神話[としての]日本の古典の伝統」(p.248)を描いたとして、加藤玄智の1926年のテキストを称賛している。そして、ピッケンは、ヘレン・ハーデカーの『神道と国家』から、1868年から1930年までの神道と国家の関係についての短い歴史を記した4段落を紹介し、「それによって何とかして国家神道を再建しようとするシナリオが、一部の日本人の頭のなかにあるかもしれないという陰謀論へと[傾いている]」(p.96)として、彼女による批判的な歴史の概観をまとめてしまっている。

これは同書に何ら良い点がないといっているわけではない。長らく絶版であった英語や日本語による研究からの抜粋引用や、椿大神社の宮司である山本行隆（ピッケンは、スコットランドの教会の聖職者であり、山本氏のアドバイザーと翻訳者を務め、アメリカ椿大神社の委員会のメンバーでもある）のような現代の神職たちによるテキストなど、同書は、いくつかの比較的アクセスしづらく新しい研究の翻訳を収載している。良きにつれ悪しきにつれ、149ドル95セントの価格では、ピッケンの選集は限られた読者層の手元にしか届かないだろう。

ピッケンの *Sourcebook in Shinto* は、本質主義者の神道解釈が隆盛していること——研究者たちのあいだでないとするならば、少なくとも、数多くの最も勢い盛んに発言している神職たちや、新宗教の指導者たちのあいだで——を、我々に思い起こさせてくれる。カスリスの書が示しているように、本居のエキゾチックで、審美的で、ロマン主義化された理想の魅力は、とても根強く残っている。幸運にも今日の大部分の研究

者による研究は、本居が解き放ったように、神道とカミ信仰について我々により緻密に理解させてくれている。そのような意識を人々へともたらず入門となるテキストが、これらの書のどこかにあることを願うばかりである。

・参照文献

- BREEN, JOHN, AND MARK TEEUWEN (EDS.). 2000 *Shinto in History: Ways of the Kami*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- CHAMBERLAIN, BASIL HALL 1912 *The Invention of a New Religion*. London: Watts & Co.
- HARDACRE, HELEN 1989 *Shinto and the State, 1868-1988*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- MATSUNAGA, ALICIA 1969 *The Buddhist Philosophy of Assimilation: The Historical Development of the Honji Suijaku Theory*. Tokyo: Charles E. Tuttle.
- MORI, ARINORI. 1928 *Religious Freedom in Japan: A Memorial and Draft Charter* [1872]. Reprinted (facsimile) in Yoshino Sakuzô (ed.), *Meiji Bunka Zenshû*, vol.11, 1-13. 24vols. Tokyo: Nihon Hyôronsha, 1927-1930.
- (森有礼「英文日本宗教自由論」吉野作造編『明治文化全集 第11巻 宗教篇』日本評論社、1928年)
- PICKEN, STUART D.B. 1979 *Shinto: Japan's Spiritual Roots*. Tokyo: Simul Press.
- 1994 *Essentials of Shinto*. Westport, CT: Greenwood Press.
- TEEUWEN, MARK 2006 "Review of Shinto: The Way Home." *Journal of Japanese Studies* 32, 1, 268-73.
- TEEUWEN, MARK AND BERNHARD SCHEID (EDS.) 2002 "Tracing Shinto in the History of Kami Worship." Special edition, *Japanese Journal of Religious Studies* 29, 3-4.

¹ [原注] M・テーウェン (2006) が、同書のなかの他の細かなことがらに関しても書いているように、ここではカスリスは自分の事例を誇張している。大和魂 (本来の日本民族の精神) のフレーズを西洋の野蛮人たちの排斥と天皇への崇敬とに結びつけたのは、篤胤ではない。というのも、彼の継承者たちがその接合をなしたのだが、篤胤はそのスローガンが世間に普及する前に死去しているのだ。